現代に学ぶ 摩耶夫人の子育て

NPO法人親学会理事長　益田　晴代

親学とは

未来を担う子どもたちをどう育てたらよいか。四人の子どもを育てながら常に思ったことだった。

話題の子育て本、テレビ、新聞等々子育てに関する記事をできるだけ気をつけて読んだりしたのだったが、やはりその都度の子どもの成長に解らないことだらけだった。

その頃、地域で開催された「家庭教育研究会」の参加により、子育ての毎日の具体的な関わり方を学び、不安や悩みを相談することができ、助けられて、無事に四人の子どもを育てることができた。

自分の子育ての道のりを助けられたことから、これから子育てを進め親になる皆さんのために、親の学びの場として、二〇〇四年、親学会を有志とともに開いた。

毎月各界の講師を招いて、未来を担うわが子のために、親はどのような考えや願いをもって子育てを進めたらよいかを、産科医、小児科医、細胞学、発達心理学、脳科学、教育者、保育士の諸先生。当日は講演後、講師先生と参加者一同のサロン形式で質問、意見の交換を進め、認識を確かめ、深め、現在に至っている。

参加者は子育て中の両親、祖父母、保育関係、学校関係、先生、有志の諸氏である。

摩耶夫人　釈尊の母

東洋思想の祖、仏教の祖「釈尊」の人格を育てられた母、摩耶夫人のことをあるときから強く知りたいと願うようになっていった。

摩耶夫人とは「どのような方だったのか」「どのような願いを持って子育てをされたのか」と、そのことを求めて十数年前、インド、ネパールの旅に出発した。

摩耶夫人は、現ネパール国デブダハの当時の王族コーリヤ族の王女だった。デブダハは今もそこかしこに、二千五百年をタイムスリップする仏伝そのままの遺跡群が点在する。

ラーマグラマー＝釈尊の八つ目の仏舎利塔が守られている。

ロヒニー河＝釈迦族との水利権の激しい争いを伝える河は今も水が流れている。

ダフネ山＝摩耶夫人瞑想完了の聖地

コーリヤ族は近隣諸国随一の資産家だった教育熱心な父王の進めで、国内外から著名な学者を招いて王女は最高の教育を与えられて育った。

成人した王女の美しさは諸国に伝わり、求婚者が殺到し、激しい争奪戦になったため、王女はある夜ひとり領地内のダフネ山の森深く身を隠し、人々の幸せを願って瞑想の修行に入った。

九カ月の満願に天の啓示「王宮に帰って、結婚して良い子を産み育て、人類に貢献をするように」王女は王宮に戻り、釈迦族の王子浄飯王と結婚した。

ある夜、夢に摩耶夫人を、めがけて天空より白象が飛び降りてきた。その後釈尊を受胎する。

当時、白象は「神」と敬われていた。摩耶夫人は十カ月の胎児期を神から与えられた尊い我が子と敬い、祈りの日々を過ごしたと伝える。

春爛漫の四月八日花々の咲き乱れるルンビニー園で、待ち続けたわが子釈尊を出産し、七日後にあの世へと旅立った。

浄飯王と摩耶夫人（絵…橋本豊治）

パティ夫人（釈迦教団最初の尼僧波提比丘尼、摩耶夫人の妹）

当時の風習により、姉妹は一緒に嫁入りをし、姉とともに浄飯王に嫁いだ。姉の子釈尊の母となってお育てしたのがパティ夫人である。パティ夫人は姉同様に美しく

聡明で、心豊かな女性であった。釈尊のすぐ後に、わが子ナンダ尊者を出産した。ナンダ尊者は釈迦教団随一の美男と伝記はつたえる。

パティ夫人は母を失った釈尊を哀しみ、自身の母乳を釈尊に与え、我が子は乳母のお乳で育てられた。釈尊を我が子同様に愛おしみ、我が子とふたりを両手に抱いて、かわるがわる頬ずりをし、笑顔で語りかけ沐浴させ、丁寧に身体に油を塗り、おむつを替えて、お乳を与える繰り返しの毎日であった。

このようなパティ夫人の温かい子育てを知った人々は、良き母を授けられた釈尊の幸福を心から喜んだ。

我が子釈尊の成道の祝いにと、木の種を庭に植え毎日心を込めて水をあげ、育て、糸をつみ、美しい布を織って、僧衣を縫い上げ贈った。

その贈り物に釈尊はあまりにも深い母の愛を知り涙を流された。その後、僧衣は教団の宝として後世まで大切にされた。

覚者となっても、なおも我が子を陰から見守り百二十歳で亡くなったと、伝記はつたえている。

現代の子育て

一、NHK特集「赤ゃん…胎内からの出発」

生命の始まりから赤ちゃんは意志があることをいろいろな事例を基に紹介され、赤ちゃんに関わる両親がこのことを認識した上での子育てが大切と、映像の特集によって教えられた。

二、神経回路（シナプスとニューロン）

胎児期における神経回路の成長過程は妊娠初期から発達が始まり、全盛期の感受期は誕生の三カ月までであるという。この期間の胎児のシナプスとニューロンの発達がそれを示しているという。人間の生涯に成長する神経回路の発達の最高期であり、この期間を過ぎると、開かれていたその部位が徐々に扇を閉ざす。

三、小鳥の雄の赤ちゃんの感受期

小鳥の雄の赤ちゃんの場合、生後一時間が感受期という。この時間までに歌を教えないと扉は閉じられ、雌鳥に愛が伝えられず結婚が出来ない。この感受期は父鳥が必ず教える決まりとなっていて、どことなく飛んで来て歌を教える。

四、水の結晶

二つの器に水を入れ、片方は良い言葉、片方に悪い言葉を伝える実験データによると、良い言葉かけの水は美しい結晶を作り、輝いていた。悪い言葉かけの水はぐちゃぐちゃに乱れて結晶ができない。

すべての子どもたちの願いは愛してほしい、認めてほしい、信じてほしい、と考えるからである。

五、心と体のバランスの子育て

未来の子育ては以上のような人の発達の仕組みを親は学び、最も重要な我が子の心の成長を見守り、育てることを進めることと考える。

六、摩耶夫人の子育て

釈尊の調和のとれた素晴らしい人格と瞑想の遺伝こそ、摩耶夫人が胎児期十か月の深い愛と祈りと優しい言葉がけであったと考える。

ダフネ山の九カ月の修行の日々がそのことを物語り、仏教の瞑想法は摩耶夫人の遺伝子であったのだろう。

七、パティ夫人の子育て

パティ夫人は幼いころから姉妹として育った姉、摩耶夫人のすべてを理解できる人であったと考える。姉が待ち望んだ我が子への願いや夢を十分に分かって釈尊に関わり、我が子として大切に育てられたはずである。

パティ夫人の人間性を物語る詩集は沢山残されている。教養と智慧と優しさと温かさ、素晴らしい人格の持ち主と伝える。

釈尊への子育ては摩耶夫人が胎児期に与えられた愛の言葉や祈りと共にお胎の中の釈尊に将来に向けての希望や願いを授けられたと思われる。子育てとはすでに、その子に有るものを引き出して、本人の肯定間を体感させ育ててあげる。この基本を心得て進められたと考える。

二千五百年前、現代の科学で分った人格形成に重要な、関りの子育てを、進められたことを現地に立って知り、あらためて感銘を深くした。世界においてこれからの子育ての参考として、進められることを切に願い、偉大な釈尊を育てた母二人（姉妹）の人類への貢献に深く感謝を申し上げてこの章を終わらせていただく。

合　掌